『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』25（2023）：23-42

「娘と熊」の伝承と熊儀礼

荻原眞子

キーワード：伝承「娘と熊」、熊儀礼、女性のタブー、模擬相撲、北半球

はじめに

熊儀礼（熊祭）は A.ハロウェルの『北半球のクマ儀礼』(1926)を嚆矢として、20 世紀には民族学、文化人類学、考古学などの分野で、特にアイヌ文化研究をはじめとして北方研究では魅力的な課題として多くの研究者の関心を集めた。ソ連時代には、ハロウェルの研究に即して B.ヴァシーリエフがシベリア諸民族の熊儀礼に加えてアイヌの飼いグマ送りを論じた。[荻原　2022]

森や山野で仕留められてキャンプや集落に運ばれてきた熊は、一般的に「客」として歓び迎えられる。熊は毛皮を剝がれ、しばしば頭は上座に置かれて祭宴の主客とされ、肉体は解体されて食され、頭骨は樹木や杭に掲揚、骨も保管される。熊儀礼もしくは熊祭とはこの一連の行事のことである。シベリアの狩猟民のもとでは熊ばかりでなく、鯨やアザラシなど海の獲物は客であって、それには多かれ少なかれ熊に対するような儀礼が行われていた。熊のみならず生きものを糧とする人間の営みに共通した観念やしきたり・儀礼は、20 世紀世界における社会経済的な変化のもとで次第に現実的ではなくなった。それでも狩人にとって熊は相変わらず大きな貴重な獲物であったところでは熊儀礼が続けられ、熊肉は貴重な食として祭儀のなかで人々に喜ばれた。一方狩猟の意義が薄れたところでは民族文化継承という目的で熊祭が再現されることにもなった。

それはそうとして、20 世紀を通じてシベリア各地で記録されてきた熊儀礼には共通する特徴が少なくない。それはまた、19-20 世紀初期の北アメリカ先住民の記録にも通ずる。熊儀礼での一般的な鉄則であったのは、儀礼の主催者である熊を仕留めた狩人や仔熊の飼い主などが、そのキャンプや集落などの全ての成員を招集しなければならなかったことである。このことは数多くの熊儀礼の記述のなかで共通する顕著な特徴となっている。熊肉の分配には決まりがあって、狩での役割、男女、年齢、社会的な役割の敬重、親族関係などが勘案された。熊肉には誰もが与からなくてはならず、それに漏れることはあたかも穢れでもあるかのようであった。そうしたなかで女性には熊や熊肉について制約やタブーがあったことが共通して認められる。例えば、女性が食することのできる熊肉の部位やその調理などが別に定められていたのである。また、殺された熊が搬入される際に、未婚の女性はその場からはなれなければならない所もあった。

一方、シベリア諸民族で採録されている神話や伝承のなかには熊儀礼の由来を語る「娘と熊」の説話がある。伝承を即儀礼に結びつけることには、慎重でなければならない。そのことは胆に銘じなが

ら、この説話とシベリアや北アメリカの熊儀礼に共通する「女性に対する熊肉の制約」、それと共に熊儀礼で再現される「少年とクマ」の模擬相撲について検討してみる。

Ⅰ　「娘と熊」の話　―　熊儀礼の起源と女性のタブー

熊儀礼の謂われを説く伝承のなかでもっとも端的に語られている例は、東シベア・エヴェンの「トルガニ」、西シベリア・ケートの「カイグス」、西シベリア・エヴェンキの「ヘラダン」である。「トルガニ」では娘が熊穴で冬を過ごすし、やがて人間と熊の子供を産む。「カイグス」では、娘を嫁にした熊がその父親たちに殺される。「ヘラダン」では、娘を救った熊が死に際に娘に死後の処置を言い遺す。

以下は説話の概略である。

①　エヴェンの「トルガニ」（1）　－　熊穴で救われた娘

姉妹がトナカイの見張りに行って吹雪に遭った。夜 二人がトナカイの足跡を追っている間に、妹がいなくなってしまった。姉は妹を見つけることができず、探しているうちに熊の穴に落ちてしまった。姉は熊のそばで、熊の足裏を啜って冬中を過ごした。春になって娘は熊といっしょに外へ出た。熊は娘に家へ帰る道を教えた。娘は両親といっしょに暮らしていたが、その内にいなくなった。母親が水を汲みに小さな洞穴の傍を通ると、子供の泣き声が聞こえた。穴のところへ行ってみると、娘と二人の赤ん坊がいた。一人は全身毛皮に蔽われていたが、もう一人は普通の子供だった。母親は娘が人に笑われないようにと、仔熊を引き取り、娘は男の子を育てることにした。

兄弟が大きくなったとき、若者は熊と力比べをしたくなった。若者は熊を「爪の代わりだぞ」と云って尖った石を手にして熊に向かい、熊を殺した。若者はトルガニという名だった。死に際、熊は人間が熊を狩りして、毛皮剥ぎ、祭宴と埋葬の儀礼をするよう言い遺した。母親は熊の肉を食べなかった。 [Василевич 1971:155]

②　ケートの「カイグス」－　娘を嫁に掠った熊

西シベリアのケートでは仕留めた熊は祖霊の再来と見なされ、それを確かめる占いをはじめ、熊儀礼ではいくつか特徴的なしきたりが見られる［Алексеенко 1974］。「カイグス」はケートの神話に登場する文化英雄でもあるが、「自分は人間だ」と称して娘を嫁にしようとするが叶わず、娘の父親たちに殺される。死に臨んで娘に「遺体の処置と自分の肉を食べてはならない」と言い遺す。

川上のカイグスがあるとき人間のところへ下ってきて、結婚するために女をさらって行った。カイグスと女は息子の熊を育てたが、熊は大きくなると「父さんは人間のところから母さんを連

れてきた。ぼくも女をもらいに人間のところへいってくる」と云った。「おまえはまだ力が足りないから行かぬがよい、人間に殺されるぞ」という父のいうことを聞きいれずに、出かける。

息子のカイグスはシマリスの毛皮100枚の束、オコジョの毛皮の束、イタチの毛皮の束、リスの毛皮の束を持って下へ出かけた。シマリスが巣穴の上にいて、訊ねた。「川上のカイグス、どこへいく？」「人間のところへ嫁をもらいにいくのだ。」「川上のカイグス、いくな、人間はおまえを殺すぞ。」「いいや、人間には殺されないさ。」「人間はおまえを殺して、肋骨を木の根っこで縛って、それといっしょにおまえを帰すのだ。肋骨がカチカチいうぞ。」「わたしは殺されないさ！」（カイグスはシマリスのところから順にオコジョ、イタチ、リス、テン、ウサギ、キツネ、オオカミ、クズリに会い、そこで同じやりとりを繰り返す。）　黒い森のところで、カイグスはキャンプへ下りてゆき、老人のチュム（天幕）へやってきた。そこには娘がいた。すでに夜で、暗かった。老人は娘に水を汲んでくるようにと云い、娘は「今夜、行ってくるわ」と云った。カイグスは娘を待ちかまえていた。娘は白樺皮の水桶を持って下りてゆき、氷穴から水を汲んで、チュムへ戻ろうとしたときに、カイグスは彼女をつかまえた。「怖がらなくていい。わたしも人間だ。川上のカイグスだ」と云って、彼女を背負って連れ去った。

老人は待てど暮らせど、娘が戻ってこないので、母親に見にいかせた。母親は隣のキャンプにも行って尋ね歩いたが、娘はいなかった。朝がくると、老人は自分で見にいった。熊がやってきて、娘を連れ去ったのだ。老人は隣のチュムへ行って、「どうやら、娘は熊にさらわれたらしい。長槍を研いでおくれ」と人々に云った。人々は長槍を研ぎ、怒りながら熊の跡を追った。どんどん行くと、熊は追っ手があることに気づいた。「わたしは人間なのに、人が追いかけてくる。」

彼はシマリスの毛皮の束を投げた。老人はその毛皮のあるところへやってきた。人々は「爺さん、シマリスの毛皮の束があるよ」と云った。老人はそれには目もくれずに先へ行ったので、人々も熊の跡を追った。その先にはオコジョの毛皮の束、イタチ、リス、テンの毛皮の束が次々に投げられていたが、老人はそれを無視して、追跡してくる。カイグスはウサギ、キツネ、クズリの毛皮の束をおいたが、老人はそれにかまわず追ってくる。その先で、カイグスは絹の上着をおいた。人々はそこへくると、「爺さん、絹の上着だ。これをもらいなさい。」老人は立ち止まって、「取ろうか、取るまいか」と考え、しばらく動かなかったが、やがて歩きだした。

カイグスは嫁の娘に云った。「殺そうとして、追ってくるのだ。今や、おまえの父さんはわたしを殺すだろう。」カイグスは娘を背中から降ろした。「ここにいなさい。かれらはわたしを殺したいのだ。」それからこう告げた。

「わたしが殺されたら、右足を切り、それから頭を切り取り、ここへおいておきなさい。女は三日間わたしのそばにいなさい。わたしのそばにユコラ(干魚)を供えなさい。脂身、ポルサ（魚粉)、煮たものを供えなさい。」

カイグスは人間たちに向かって戻っていった。出会うと、カイグスは人間に怒りを露わにして襲いかかって脅した。人々は長槍でカイグスを殺した。

老人は娘を迎えにいった。彼女がくると、カイグスはすでに殺されていた。彼女は泣き出し、「あれほどたくさんの毛皮をおいてきたのに、それでも足りなかったのですか。彼は人間だったのに、その彼を殺してしまった。」

老人たちは熊を家へ運んでいき、毛皮を剥ぎ、毛皮から両耳を切り取り、白樺樹皮に包み、その上に肋骨を描き、首のところには鼻面をくっつけた。それから、この熊のまえに脂身をおき、娘はそれを熊に食べさせた。人々は熊肉を食べたが、彼女は食べずに、熊のそばに三日留まった。それから人々は骨を集め、肋骨はエゾノウワミザクラのサルガ（根）で縛り、それらを山へ持って行った。骨は音を立てて父親のところへ戻っていって、甦った。(後略)［Алексеенко 2001: No.56］

この話では、熊は人間に殺されて死ぬことを覚悟し、死後の遺体の処理と嫁に自分の肉を食べてはならないと言い遺す。こうして父親と狩人たちによってケートの熊儀礼がなされることになる。

③　西エヴェンキの伝承「ヘラダン」―　熊に救われた娘

シベリアに広く居住するエヴェンキには地域区分として、西部（アルダン・エニセイ川地域～アンガラ川北方～エニセイ川西）、バイカル湖地域、東部（オホーツク海側のエヴェンキ、エヴェン、サハリンのウイルタ）が分けられる。西部には「ヘラダン」という少女と熊の話がある。

あるお爺さんに 5 人の娘がいた。あるとき、老人は水が飲みたくなり、娘たちに頼むが誰も汲みにいこうとしない。お爺さんは自分で川へいき、冬だったので直に氷の割れ目から水を飲んだところ、ヒゲが凍りついて離れなくなってしまった。氷がどうしても離さないので、お爺さんは「氷よ、放しておくれ、娘をやるから」と云って、上の娘から順に名を挙げるが、氷は放そうとしない。とうとう、末娘ヘラダンの名を云って、放してもらう。

家へ帰ると、お爺さんは、「ヘラダンや、氷のところへお行き、玩具をもって」と云う。

ヘラダンが氷のところへいくと、氷は岸から離れ、流れだす。氷は（上界と下界をむすぶシャマンの川）エンデキットをどこまでも流れていき、途中の岸辺には老婆たちがいて、火が見える。少女は助けを求めるが、断られる。氷はどこまでも流れていき、途中で氷は「下をみると、染め粉、砥石、黒い染め粉、赤い染め粉、皮なめし具、削り具、火打ち石などがある」と歌い、その度にヘラダンは、それが「人間の遺骸だ」と応ずる。

遂に、10 個の太鼓をもった老婆に救われて、岸に上がる。

ヘラダンは熊ガモンドリ（*нгамонд*^{р}*и*）のところへ行って暮らす。熊は云う。「わたしを殺して、皮を剥ぎなさい、私の心臓はいっしょに寝せなさい、肝臓は天幕の上座、十二指腸と直腸はその

向側におき、毛は乾燥した穴のなかにばらまき、小腸は傾いた木の枝に吊るし、頭は上座の奥におきなさい。」

ヘラダンは熊を殺し、熊が云ったことを実行した。朝目ざめると、自分の向い側にはお爺さんとお婆さんが眠り、上座には 2 人のこどもが戯れ、そのそばには老人が眠っていた。小屋の外へ飛び出すと、外にはトナカイが歩き回っていた。谷にはトナカイが沢山いて、傾いた木にはトナカイの端綱がかかっていた。(トナカイ飼育の起源?)

ヘラダンがトナカイの背を押してみると、どれも弱く撓んでしまうので、一番小さいしっかりしたのに端綱をつけて乗ると、エヴェンキのところへいった。そこでいくつものチュムを飛び越えるが、10 番めのチュムで捕まり、熊のところを離れたことを悔やむ。[Василевич 1936:38-40 (荻原 1995：231-235)]

この説話はかなり古くに採録されたものであって、全体として異なる話が一つになっているようである。すなわち、老人と氷、末娘の犠牲、氷＝シャマンとシャマンの川･死後の世界、熊と娘の話がひと続きに語られて再録されたものであろう。そのなかで、熊が娘に死と解体の手順を説いた話は熊礼のことである。ただ、解体された熊は人間に食べられるのではなく、トナカイやトナカイ飼養を暗示するものに化生したという点で、熊儀礼とは云えない。

④　熊穴で一冬を過ごした男に熊肉が禁じられた話

冬に熊が冬眠する穴は深い雪のなかにあって、吹雪のなかで道を失い難儀している狩人にとっては幸いなシェルターに違いない。熊穴に落ちて難を免れたとか、そのまま春まで過ごして村に生還したという話は北方地域では各地に伝承がある。千島アイヌでは次のような話が採録されているが、熊穴に籠もったのは娘ではなく狩人である。

その昔、アイヌの二人の兄弟がカムチャツカへ熊狩りにでかけたという。それは冬であった。ある日、猟に出かけた弟が山へ深く入りすぎ、道に迷ってしまった。風が吹きすさび、積雪が深くなり、時が過ぎ去って夜が近づいた。不安になったので、彼は休む所をあちこち探した。しかし見つからないので落胆していたとき、目前に岩穴を発見した。そこには一頭の熊がいた。熊がただちに洞穴の奥から出てきて、この新参者に声をかけた。「ここになにをしに来たのか。」若者は答えた。「道に迷ったアイヌの猟師です。どうかお願いします。あなた様と一緒にここへ一晩泊めてください。」親切な熊はこたえた。「よろしい。おはいり。安心してお休み。」そこで猟師は中へ入り、一夜を無事に過ごした。

朝になり、空腹をおぼえた彼は、何かたべるものを探そうと考えていたとき、熊が手を差し出

した。そこで猟師はそれをなめると十分に満腹した。また、喉がかわいていたが、再び熊が手をだしたので、それを吸うと、渇きがいやされた。彼はこのようにして、洞窟の中で幾日間も熊とともにくらし、熊とすっかり仲良くなった。

しかし、ある日のこと、熊が猟師に云った。「もしも君が私を殺したいと思っても、どうか私の肉は食べないでください。」若者はこのような申し出を深く悲しみ、ただちに「私はあなたを殺すようなことはしない。だから、あなたの肉を食べるなんてこともしない」と答えた。

その後熊に歓待された猟師の兄もまた狩猟に出かけた。山を駆け巡るうち、ある洞窟の前に出た。彼はそこに入り、熊を見つけると弓を執り、矢を射て熊を殺してしまった。その熊は弟の親友であった。兄弟は久しぶりに再会きたうれしさで非常に喜び、弟は熊とかわした約束を忘れ、熊の肉を切ってたっぷりと食べ、また頭を胴から切り離し、それをもって帰途についた。

家に着くと、彼らは竈の前に三本のイナオ(幣)を立て、熊の頭を二番目のイナオの上に置き、これをカムイすなわち神とした。その時までカムチャツカの熊は決して人を襲わなかったが、この熊の「殺戮」以来、熊は人間の敵となって人間を襲うようになったのである。

千島アイヌは「熊をチラメンデプ Tchiramendep あるいはキム・カムイ Kim-Kamoui(山の神)と呼んでいた。彼らがイナオを立てるときは、必ずこのキム・カムイという語を口にした。これは疑いもなく降霊のためであろう。[鳥居：474-475]

熊儀礼の起源を語るエヴェン、ケート、エヴェンキの伝承ではいわゆる「人と動物の婚姻」が暗喩されており、熊は死に臨んで娘･嫁に自分の埋葬を遺言する。エヴェンの「トルガニ」では、次節でみるように、熊が死ぬのは娘に産まれた人間の子供との決闘のあげくである。ケートでは「カイグス」は熊として人間に殺される。エヴェンキの「ヘラダン」でも、熊は死後の手順を遺言する。着目すべきことには、熊は人間に殺されることを所与のこととしながら、熊穴でいっしょに過ごした女性だけでなく狩人にも熊を食べることを禁じた。こうしてみると、熊穴での同衾には婚姻に類するような意味があることになるのかもしれない。

Ⅱ-1　ユーラシアの熊儀礼における女性に対する制約

北半球の各地で採録されている熊儀礼の記録ではさまざまな形で女性には男性と異なる対応が見られる。 そのもっとも顕著なことは熊肉についての制約である。

①サハリンアイヌ

＊（「文献にアイヌの女性が母乳で仔熊を養うとある」ことについて尋ねると、フムカ翁が丁寧に説明した。）「それはめったにあることではないが、仔熊がまだ全く母親離れをしていない場合、余りにも

小さいと、手袋の中へいれて家へもって帰る。世話をするには、子育てをしていなくて、もう子供を持てないが、まだお乳のでる若くない女性を頼む。6ヶ月までは女性のお乳で育てるが、その女性はその間煮炊きや刃物で調理をしたり、縫い物など女性の仕事をしない。祭では育てた熊の肉を食べない。［Пилсудский 1914：83-84］

＊（男性たちへ熊肉の供応が終わって、女性の番になる。）女性に残された特別な部位は次である。尾、脛の名の分からない（3つに切った）骨と前腕骨。 橈骨と腓骨、それと名称不明の2つの骨は主だった女性に配られた。尾は主として熊の面倒をみた女性が受けとらなければならなかったが、彼女はまだそれほどの年ではなかったので、尾はその伯母である年輩の女性に与えられた。［Пилсудский 1914：138］

＊　焼く熊肉で、女に食べさせない部位　－顎から鎖骨、心臓、肺臓, 肝臓、前脚の筋肉。その他女性に禁物の部位は脳、頭の両側の肉、第一頸骨の肉、第二頸骨、その他の椎骨、第八頸骨。通常女性に与えられるのは、尾、名称不明の骨の三分割（下部の二つは裕福な女性、上は貧しい女性に)、脛骨(脛骨と腓骨)、前膊骨（橈骨と尺骨）である[1]。

②ニヴフ

熊の肉と脂肪にはタブーの部分とそうでない部分があり、タブーの部分はタブーのナイフで切るが、そうでない部分は普通のナイフである。タブーの部分の肉と脂肪は男性だけに許され、女性にはそれを食べることが許されない。男性はタブーの部分とそうでないところも食することができる。男性のタブーの部分は「男の食べるところ」、そうでない部分は「女の食べるところ」とも呼ばれている。「男の食べるところ」は、下顎、喉、気管、上の肋骨3つ（これを男が食べることができるのは、熊が敵を襲う時に先ず活躍するのがこの肋骨だからである)、胸骨、はじめの頸骨2つ、心臓、肺臓、肝臓、脾臓、横隔膜、乳頭、脚の一番大きな筋肉と腱、直腸、「箙の脂肪」、肩甲骨の脂肪、腸網膜（語義は胸当ての脂肪)、脾臓の脂肪などである。

「女の食べるところ」は、長い肋骨3本、短い肋骨3本、「棘のある肋骨」、寛骨、椎骨、肩甲骨、腰骨、腰部の肉（他の氏族とみなされている姉妹に与える)、臀部、尾の周りの肉と尾骨（大変美味、姉妹に与える)、足裏と足の肉（男が食べる部分を除く)、胃、腸、腎臓、熊の後半分と腹部の脂肪で

[1] 熊肉各部位のアイヌ語。нохкірі 顎から鎖骨、самбе 心臓、hапану 肺臓、тепут/урáка 肝臓、ентеje 前脚の筋肉。女性の禁物は кеоро 脳、кірaj кам 頭の両側の肉、кео кам тасі 第一頸骨の肉、цінунук тасі 第二頸骨、куціс тасі その他の椎骨、акапоні 第八頸骨。通常女性に与えられるのは、охцара 尾、кірікеупоні 名称不明の骨の三分割（下の二つは裕福な女性、上は貧しい女性に)、утоні поні 脛骨(脛骨と腓骨)、амуні поні 前膊骨（橈骨と尺骨）である。［Пилсудский　1914：注 41:155］

ある。

肉と脂身については男女の別だけでなく、老人だけが食するが、若者や少年は絶対に食べてはならない部位がある。例えば、熊頭の肉、舌、心臓を食べることができるのは老人だけである。若者や少年は熊の足も食べることはできない。それは数切れを除いて、女性が食べるのである。［Крейнович 2001：238-239］

③ネギダル

熊肉は前半分と後半分に分けられ、前半分アブゴリは男性のもので、女性にはタブーである。後半分アサクシは女性が食べられる。アブゴリは頭全部（脳と舌）、内臓（肺臓、心臓、肝臓、腸、胃）、大動脈、頸骨上三つ、鎖骨、背骨一つ、胸骨、肋骨の下三本、前足とその他の部分の肉少々である。内臓で女性が食べることができるのは肝臓である。［Цинциус 1971:194-195］

④ウリチ

（熊儀礼の第 15 日目）　祭主とそのクラン、数多の客たちは年や男女にかかわりなく熊肉に与るが、肉の分配にはさまざまな守るべき決まりがある。女と子供に舌は禁物、足は食べるが、それは男性には禁物である。男性が足を食べると、いつか森のなかで熊に襲われるという。前肢の二頭筋と性器はそこにいる最年長の男性が食べる。共食のあいだ男性、女性、子供は別々に座る。［Zolotarev :120］

⑤ウデヘ

祭に参加する女たちには脚、足、頭と心臓を食べることはできない。［Браиловский：359］

⑥ウデヘ

＊熊肉を食することには男性も女性も加わったが、それぞれ別のユルタであった。熊の後脚の肉は女性に与えられた。「その丸っこい筋肉は膝の下にあって、女性の食べ物とされている。女性はそれを屋外で、必ず自分の鍋で煮なければならない。通常村中の女性たちはいっしょになって村からは見えないところへ出かけていく。彼女たちは自分の食器とナイフをもって行く。肉をすっかり食べきってから、自宅に帰ってくる。食べきれないときには、翌日に残して、その都度村からその場所へ出かけて行って、熊肉を食べ尽くす」とアルセーニエフは記している。［Старцев :114］

＊ウデゲの熊祭に他の氏族で閉経した最年長の女性がいると、彼女には熊頭の肉も含めて熊肉を食べることが許される。たゞ、彼女は新しい服を着て、口をあけて男性の手から与えられる肉をもらうのである。熊頭の肉を食べることができるのはオロチでも妻方の氏族の最年長の女性である。［Старцев :114］

⑦オロチ

・・・焚き火を熾し、肉を串焼きにして、全員が車座になって共食する。どれ程の人がいようと、全員に肉が少しでも行きわたるようにする。あるオロチの話では、この共食には女性も参加するが、例えば、ウイ川では女性は熊肉を食べないばかりでなく、それに触れることもしない。[Маргаритов :34]

⑧エヴェンキ

（熊肉のタブー）　娘は熊の頭を食べてはならない、食べるとお産の時に頭が背中に「引きつけられる」。産婦には熊の首の肉を与えてはならない、お産の時に首が「曲がる」という。また、男の子には脚の下の部分を与えてはならない、将来狩で熊に顔を引っ掻かれないために。おしゃべり前の小児には、唖にならないよう、熊肉を与えてはいけない。[Василевич 1957：167]

⑨ボドカーメンナヤ・エヴェンキ

解体の仕方はシム・エヴェンキの場合と多少違って、頭を頸骨部で斬ると、眼球を取りだし、それを樺皮か枝に包んで、森へ持っていく。そこで白樺の幹の 3 面を削り、2 メートルほどの高さの所に切込み（チュキ）を付け、そこへ目の包みを納めて、次のように告げる。「お爺さん、お前さんの目をチュキに隠しますよ、ホシガラスが啼いている！」幹を削った部分には熊の血を塗った。

翌日狩人たちは熊の頭を煮て、夜にそれを食べる。食する前には熊に向かって、「爺さん、お前さんの頭をトゥングースの息子が欲しがっている。」男たちは煮た肉も食べるが、女たちに許されているのは肋骨の肉だけである。時にはしゃぶった肋骨を「丸太になれ」、「倒木になれ」と言って、肩越しに投げる。それは狩人がタイガで熊に出くわしたときに、熊との間に木が倒れるようにということである。[Василевич 1971：163]（1920 年代の調査）

⑩フィン

（熊祭では娘と子供が熊から遠ざけられる。）煮た熊肉が運ばれてくると、家の入口に立っている主がこう告げる。「子供たちは広間から出なさい、若い娘たちはドアの周りにいてはならない、大事なお客が tapa（？）にこられるのだ、名高いお方が家に入られるのだ。」　熊は幸運な狩人に獲られることを嘉とした。隣人たちは最高に着飾って、指定のところに集まった。熊の頭は木に吊されていて、客たち皆の目を惹き、森の強力な獣を殺した幸運な狩人を褒めそやす。そうして、狩人は栄誉の印としてその武器（銃？）に銅のキーを付ける。(Hallowell :98)

⑪ラップ

＊Thurenius(？)によると、「女性に分けられるのは肩甲骨より後の部分である。（臀部の脊椎骨の 3 本か 4 本は最年長の男性のものである。）心臓は女性にはタブーであるが、それは多の動物についても同様である。男性がそれを食べるのは力と度胸を得るためである。別の著者によると、女性は決して熊肉に触れず、食べるのは串刺しであるという。［Hallowell：103（注 428)］

＊ラップの男性は特別に設けた小屋で熊の肉を料理するが、そこへ女性が入ることは許されない。その間は「料理をする」という通常の言葉ではなく、婉曲的な特別の語が使われる。・・・男性も女性も同じように殺した熊の肉を食べるが、必ずしも同じ場所においてではない。熊肉の部位は男女それぞれに特別なものがある。シャマンの役割は男性たちにその部位を分けることであり、「リーダー」たちが女性にきめられた分け前を用意すると、二人の男性がそれを女性に届ける特別な役をする。二人はその際に「さあ、スウェーデン、ポーランド、イングランドとフランスからの客のご到来だ」という意味の歌を歌う。それに応えて、女性たちは「スウェーデン、ポーランド、イングランドとフランスから来られた御仁たちに、赤い糸を足に結んであげましょう」と云って、実際にそうする。男たちが肉を家のなかへ入れるのは通常の戸口ではなく他の場所からである。肉は全部その日のうちに食べ、何も残してはならない。

熊の骨はすべて無傷のままで会食の後、元の姿のように整えるようにして、埋められる。［Hallowell：104-105］

Ⅱ－２　北アメリカ先住民の熊儀礼における女性に対する制約

I.ハロウェルの蒐集になる北アメリカ先住民の熊儀礼においても、処々に女性に対する行動や食の制約が記されている。

①Montagnais-Naskapi バンドについて、ハロウェルは自身の観察によって、次のように記している。「熊がキャンプに運ばれてきたのは夕刻のことで、すぐに若い娘と既婚の女性たちは（子供を連れずに）自分の家から少し離れたところに設けられたシェルターに退いた。犬も会食の小屋 wigwam から遠ざけられた。熊肉は二つの鍋で同時に料理され、それぞれ別々に食べられた。男性と共にキャンプに残っている年輩の女性ははじめの会食が終わると、その家から出ていった。男性は残っている熊肉を食べたが、こちらの食事は明らかに「完食」という儀礼的なものであった。ただ、それはアルゴンキン諸族でもけっして熊にかぎってのことではない。」［Hallowell: 64-65］

②ラブラドルの Mistassini では、「死んだ熊がキャンプに運ばれてきたときには、女性は顔を覆って熊を怒らせないようにしなければならない。それをしないと女性は病気になる。熊の身体が運びこまれるテントは清潔にして、熊は会食が始まるまではシートで被っておく。既婚の女性だけは男性の毛

皮剥ぎを手伝うことができる。」［Hallowell : 66］

③昔の Micmac は、「死んだ熊をテント（wigwam）に運び入れるのに、通常の入口の右か左に設けた特別な入口から入れた。このことは熊が住居に入った同じ処を、女性が通らないためだという。子供のいない女性と女の子は熊が食べられている間はテントから出ていかなければならない。［Hallowell : 68］

④Northern Algonkian の Eastmain の狩人が一人で熊を仕留めた場合、熊の足の中指と右前足の爪を切り取る。キャンプに戻ってくると、その証拠を、熊を森から運んでくる人にわたすが、狩人が結婚していれば、それは通常妻である。狩人ではなく、女性かだれか他の者が獲物をキャンプへ運んでくることは、アルゴンキン諸族の多くで明らかな特徴である[2]。女性は仲間といっしょに死んだ熊を運んでくる。爪は「布に包んで、ビーズやペイントで飾りつけてその時の記念にする。」

熊は解体されると、心臓の一部を含めある部位は焼かれて、「その精霊が食べるように与えられる」。仕留めた狩人は心臓の残りを「犠牲の狡猾と勇猛」を摂取するために食べる。女性は頭、足を食べること、男性には臀部が禁じられている。［Hallowell：69］

⑤North Saulteax「頭骨(carcass）はあらゆる手にはいる美しいもので飾って、人のように置かれる。女性たちは熊の舌と心臓を食べることはできない。仕留めた狩人は常に胸部、頭と心臓を得る。［Hallowell :70（注 278)］

Ⅲ　少年と熊の相撲

シベリア各地の熊儀礼では、熊狩から、この獲物を解体・消費して最後に頭骨などを祀るまでの数日の間に様々な歌舞演劇、ゲームや競技、犬橇競走などが行われて、祭の感興はいや増しに膨れあがって一大イベント、熊儀礼は祭となる。一方、そうした屋外での競技などとは別に、熊の頭骨を祀り、熊肉を共食するような場面で、少年とクマの模擬的な相撲が行われるところがあった。先に挙げたエヴェンの説話「トルガニ」には長い別伝があり、それによると人間が熊と闘って熊を殺したいきさつが説かれている。

エヴェンの説話（２）「トルガニとクマの決闘」

---

[2]　狩人が仕留めた獲物を森へ女性が引き取りに行くことは、アムールランドのウデへの説話にもある。

トナカイ飼育をしている兄弟の弟が、娘をトナカイの見張りにやる。娘たちはトナカイに乗って、トナカイたちを山の牧野へ追っていった。突然、天候が変わって、トナカイは逃げだし、姉妹はそれを追っていく間にはぐれる。姉は雪のなかで道を見失い、さ迷っているうちに、雪穴に落ちる。そこには熊が眠っていた。娘はその傍に横になる。空腹になると熊が片足を娘の口元にさしだした。娘がその足の柔らかくてフカフカする部分を吸うと、空腹が満たされた。
やがて、明るい月の光で目が覚めると、外は春になっていた。娘が外にでると、熊も出てきて、娘に家のある方向を片足でさし示した。

あきらめていた娘が帰ってきたことに両親は歓喜する。春になると、娘は行方知れずになった。あるとき、母親が険しい崖のところへ水汲みに行くと、そこの洞窟で娘と赤ん坊を見つける。一人は毛むくじゃら、もう一人は人間の赤ん坊だった。

娘は恥ずかしがる。両親は娘と赤ん坊を連れ帰って、育てることにする。父親は「熊はお前を死と餓えから救ってくれたのだ。私たちはその熊の子を立派に育てなければならない」と云った。熊の赤ん坊は「クマ」、人間の男の子は「トルガニ」と云った。
「クマ」は母親を手伝って薪運びをした。夏には山へ行ってベリーやアリやシマリスを食べた。トルガニと「クマ」はよく遊んだ。相撲をとるといつも「クマ」がトルガニを負かした。母親はトルガニの味方をして、よく「クマ」を棒で追い払った。やがて「クマ」は森へ行って、幾日も帰ってこなくなった。あるとき、「クマ」は天幕へ戻ってきて、老婆と老人の手や足をなめると、山の方へ上っていった。トルガニはその後から「僕はいつかお前を殺してやる」と告げる。老婆と老人は孫を諫めた。

やがて、トルガニは敏捷で強い男になった。あるとき、山で巨大な「クマ」を見た。「クマ」は森へ逃げた。トルガニは「クマ」に呪いをかけた。翌日、トルガニが山へ行くと、前日に伐り倒したカラマツのところに「クマ」がいる。トルガニと「クマ」は激しくぶつかりあった。「クマ」はトルガニを爪で引っかき、皮膚を切り裂き、歯で噛みついた。トルガニは「クマ」をなじった。
・・・「俺はどこで爪や牙を見つければよいのだ。俺には爪や牙がない。何か爪の代わりになるものを見つけてこよう」と言って、トルガニは何かを探しはじめた。黒い尖った石を見つけ、それを研ぎはじめた。クマは立って見ている。「俺は今や指が三本ない。腰は引き裂かれ、肉ももぎとられた。さあ、これでお前をやっつけることができる」と「クマ」に言った。

「クマ」は何か悲しげだった。どうやら、トルガニに殺されるということを予感したらしい。トルガニは尖った石を振りあげると、「クマ」の心臓を真っ向から打った。「クマ」はよろりとすると、首を垂れ、口からは熱い血が流れだした。「クマ」は言った。

「トルガニ、お前の勝ちだ。俺を葬ってくれ。今日からクマは数が多くなり、人間はクマを狩

るようになろう。俺を葬ったら、ウルカチャン祭をやれ。大勢の人を集めて俺の内臓を食べるが良い。皆を招くことだ。誰もとり残こしたり忘れたりしてはならん。俺の母は人間だ。だから、俺の頭と目と心臓は女には与えてはならん。女は自分の子供を食いたくはないだろう。俺の頭は葬ってくれ。両目にはシラカバの樹皮か何かで覆いをつくれ。それを綺麗に切り抜き、頭の毛皮を剝いで、眼窩にその覆いをかぶせろ。そうすれば熊は決して人間に歯を立てることはない」。「クマ」は死んだ。トルガニは石を使ってその毛皮を剝いだ。それから家へ帰った。

「俺は『クマ』を殺した」と彼は母親に云った。「死んだ『クマ』をどうするの」と母親が聞いた。「食べよう、ウルカチャン祭をやろう」。・・・翌日トルガニは「クマ」の肉と毛皮をすっかり家へ運んできた。そして「クマ」の言ったとおりにその頭を葬った。内臓と肉は全部煮た。そして、近隣の人々を呼んだ。大勢の人がやってきた。トルガニは客たちの前に肉の入った鍋を置いた。客たちは眺めているだけで食べなかった。恐れたのだ。女たちは恐ろしさの余り逃げていった。

そこでトルガニは歌いだした。女たちは再び天幕に戻ってきた。トルガニは鍋から肉を取って食べた。客たちも同じようにした。こうして三日が過ぎた。トルガニは母親に「クマ」を与えた。彼女は拒んだ。一切れも「クマ」の肉を食べなかった。他の女たちも拒んだ。四日目に「クマ」の骨を葬った。

そして、またトルガニは歌った。

これからはいつも、グロ、グロ、グロ、
これからはいつも、若者よ、グロ、グロ、グロ、
トルガニのしきたりによって、グロ、グロ、グロ、
クマの肉を食うがよい、グロ、グロ、グロ、
いつでもクマを殺すがよい、グロ、グロ、グロ、
生命を惜しむな、グロ、グロ、グロ、
クマは美味しくて脂がある、グロ、グロ、グロ、

こうして今日まで人は熊狩をして、熊祭を行うのだ。[荻原　1995：257-259/Новикова 1958]

これは上記エヴェンの説話（1）の異伝であるが、熊穴で一冬を過ごした娘に産まれた子供、人間と熊が長じて決闘をする。こうして、人間が熊を殺すことが正当化されて、熊儀礼と母親・女性が熊肉を口にしないことが明かされている。実際の熊儀礼ではこの説話にあるトルガニと「クマ」の決闘が、子供と骨を束ねた「クマ」との相撲として再現されるところがある。

Ⅲ－１　熊儀礼における少年と「クマ」の相撲

①ニヴフ

（犬橇競走の後）夜になるとパルキジンの家（竪穴はすっぽり雪に埋まって雪の小山のようであった）に、人が集まってくつろぎ、老人が若者たちに「誰と誰で相撲をとれ」と声をかける。ポプカという少年が上着を脱いで、戸口に近い土俵に出て、「さあ、誰か出てこい」と威勢よく云う。少しして出てきた少年と組みあって、ポプカは負け、勝ったピムカの父親はうれしがる。もう一組相撲をとったが、小さい方が大きい方を負かしたので、その場は笑いに包まれた。

（次いで、縄跳びがはじまった。本来は戸外のゲームだが、広いパルキジンの家なので、屋内でやることになった。二人が回すアザラシの皮綱が床から 25-20 センチメートルのところへきたとき、それに触れないように四つん這いで越えなければならない。人々は「熊を捕まえろ」と囃す。それは熊祭で熊が檻から出された時、その頭に飛びつく練習でもある。）［Крейнович 2001:213-214］

②ニヴフ

（煮上がった肉が橇で運ばれてきたのは、もう暗くなってからであった。出来上がった熊肉は再び煙穴から室内に降ろされた。家のなかでは朝から丸太打ちが続けられている。丸太は女子の居場所におかれ、彼女たちは歌いつづけている。）

突如として、戸口から二人の少年が組みあったまま飛びこんできた。綿入れの上着にアザラシのスカートをつけ、毛皮の帽子を被っている。女性たちは、「山の子供たちが遊んでいる、丸太を打ちながら、遊んでいる」と歌う。少年たちは、互いにしっかりと掴みあったまま、焚き火の周りを回って、出て行った。またしても、別の二人が取っ組みあいながら突っ込んできた。互いに上になったり、下になったりで激しいが、良く見ると二人ではなく一人相撲である。ニヴフの話では、熊祭の相撲ではいつも弱くて負ける者が、思いがけなく強い方を負かすことがあるのは、「山のヒトが加勢するからだ」という。［Крейнович 2001：247］

③ウリチ

（9 日目）解体した熊が橇で家へ運ばれてくると、雄熊は家の回りを一周、雌熊なら 2 周してから家の中へ運び入れる。その様子を戸口のところで 3-10 才の男の子が見ていて、熊の頭が現れるや熊に跳びかかって、毛皮を掴む。家のなかに入るのは主人の同族の者だけである。彼らは奥座（マルー）に上座を設けて、そこへ頭といっしょに剝いだ毛皮を安置する。（このことが相撲にあたるかどうかは疑問ではあるが、、、荻原）［Zolotarev :118］

④エヴェンキ

＊エニセイ川東岸のニージュニャヤ・トウングースカ川とポドカーメンナヤ・トゥングースカ川流域のエヴェンキでは熊肉の饗宴の後に「少年と熊の相撲」が行われるが、これは他の地域のエヴェンキの文献では知られていない。熊の肉を食べた後、きれいになった骨を木の枝の上に並べて束ね、両端を縛る。5-7 才の男の子がこの骨の束の「熊」や、枝に包んだ頭骨とも相撲をとって、それを地面に投げて勝つことになる。骨の束との相撲の後、頭骨は白樺の幹にはめ込み、骨はそこの枝に吊す。［Васидевич 1957:167/1971：163］

＊ポドカーメンナヤ・エヴェンキ（M.ヴァシーレヴィッチによる 1920 年代の調査）

、、、肉のなくなった頭骨は細枝に包んで、両端を縛る。その「熊」と少年との相撲の儀式が始まる。「弟」の少年は、「兄」・骨包みに組みついて、自分に投げたり、その上に倒れたりする。その場にいる人々はこの「相撲」を面白く眺めて、少年をはやし立てる。エヴェンキの話では、昔この相撲は熊の骨格を全部解剖学的に並べた束となされたという。［Васидевич 1971：163］

Ⅳ　伝承と儀礼

熊儀礼に関する伝承として本稿では二つのテーマ、すなわち、女性に対する制約と模擬相撲を取りあげた。熊儀礼の過程で行われる少年がクマを相手とする相撲は、エヴェンの説話（2）「トルガニ」にその由来が見られる。エヴェンキでは少年の相撲の相手は、儀礼で食された熊の骨を束ねた「熊」が相手である。ニヴフでは、相手が「熊」であるかどうかははっきりしない。ただ、解体後、毛皮のついた熊の頭が屋内に運び込まれた際に、少年がそれに飛びつくという一幕は、相撲なのかどうか明確ではない。伝承の有無はともかくとして、目下のところでは熊儀礼のなかで少年と「熊」との相撲が認められるのはエヴェンキとアムールランドのニヴフ、ウリチである。

一方、熊儀礼において女性に何らかの制約やタブーがあると見られるのは、食と行動についてである。女性に熊肉を禁ずるということは、エヴェンの「トルガニ」、ケートの「カイグス」、エヴェンキの「ヘラダン」のなかで伝えられている。そして、この説話で共通する特徴は女性と熊との婚姻を暗示するような緊密な関係である。エヴェンの「トルガニ」では女性は熊穴で一冬を過ごしたことになっているが、それは北国の冬場には現実にいくらでもありそうなことで、千島アイヌの狩人の話もそれである。エヴェンと千島アイヌに共通しているのは、同衾した熊が己の死を予見して、相手に自分を食することを禁じたことである。エヴェンではその相手は娘、千島アイヌでは狩人である。 娘は母親となって息子であるクマを口にしない。狩人はその約束を反古にして熊肉を食する。熊が自己の死後について、遺体の処理と熊肉を禁じることはケートの「カイグス」、エヴェンキの「ヘラダン」でも同じである。熊と緊密な関係にあった女性には熊肉の制約が科されているのに対し、千島アイヌの狩人は約束違反にも関わらず、女性に対するような熊肉の制約は無い。熊は狩人に殺されて人間集団に食べられる、つまりは、熊狩りの合理化ということになろう。

このことが一層明白に語られているのが、エヴェンの「トルガニ」（２）である。人間の母親から生まれた男の子と熊の仔が長じて格闘をした結果、人間が熊を殺すという話である。熊は死に際にいわゆる儀礼の手順を遺言する。熊が人間の獲物となるのは、この決闘で熊が殺されたからである。

熊儀礼の実際では、処々に見られるように、熊肉の分配にさまざまな決まりがある。そのなかで女性に対しては食することのできる部位、できない部位や調理についても決まりがあって、しきたりとして暗黙の裡に踏襲されてきたことのようである。敢えていえば、熊儀礼におけるジェンダーの問題ということになろう。それについて、シベリアでは傍証となる説話が散見される。一方、北アメリカの狩猟民のもとでも女性に対する熊肉や行動の制約がある。

アーヴィン・ ハロウェルが頓に明らかにしたように、北半球に広く一般的に認められる熊儀礼には、形式的な共通性が少なくないが、同時に、それには心理的精神的な側面があることも推測される。熊狩という狩猟民文化には獲物と人間、獲物と女性についての特別な観念が認められ、それには何か特異な生命観･世界観が投映されているように思われる。

文献

荻原眞子

1995　『東北アジアの神話・伝説』東方書店

2023　「（ノート）熊祭の諸相　―　I.A.ハロウェルと B.A.ヴァシーリエフからの抜き書き」CES 第 24 号：287-326

鳥居龍蔵

1976　「考古学民族学研究･千島アイヌ」『鳥居龍蔵全集』第五巻　朝日新聞社

リョンロット編（小泉保訳）

1976　『カレワラ』（下）　岩波書店

Bogoras W.

1904-1909　*The Chukchee*. Jesup North Pacific Expedition. Memoir of the American Museum of Natural History. vol.VII, Leiden-New York

Hallowell I. A.

1926　Bear Ceremonialism in the Northern Hemisphere. *American Anthropologist.* vol.28, No.1 :1-175

Jochelson W.

1908　*The Koryak*. Jesup North Pacific Expedition. Memoir of the American Museum of Natural History. vol.VI. Leiden-New York

Rockwell D.

1991　*Giving voice to Bear*. Colorado

(Scheffer J.)

1673 *History of Lapland*, Eng. trans. *of Lapponia*. Frankfurt. (未見。ラップの基本的な文献については、I.Hallowell 1926、原註 403 に詳細がある。)

Zolotarev A.M.

1937 The bear festival of the Olcha. *American Anthropologist*. n.s. 39 :113-130

Алексеенко Е.А.

1960(1995) Культ медведя. *Советская этнография.* №4 :90-104

1974 Обряд и фольклор у кетов. *Фольклор и этнография – Обряды и обрядовый фольклор.* Л. (拙訳ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵の熊祭資料（1）ケートのクマ崇拝」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2013、第 22 号：63-82)

1985 На медвежьем празднике у кетов. *Советская Этнография.* №5 p.92-97 (拙訳「ロシア科学アカデミー人類学民族学博物 館所蔵の熊祭資料（２）ケートのクマ祭にて」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2013、第 22 号：83-93)

Богораз-тан В.Г.

1992 Миф об умирающем и воскресающем звере. *Северные просторы.* № 7-8: С.13.

Браиловский С.Н.

1901 Тазы и Удиhе (Опыт этнографические исследования) (начало). *Живая Старина*: 129-216

Василевич М.Г.

1957 Древние охотничьи и оленеводческие обряды эвенков. *Сборник музея антропологии и этнографии.*(*СМАЭ)* т. XVII , Ленинград. :150-185

1971 О культе медведя у эвенков. *Религиозные представления и обряды народов Сибири в 19-начале 20 века. СМАЭ* т.XXVII. :150- 169

Васильев Б.А.

1929 Основные черты этнографии ороков. Предварительный очерк по материалам экспедиции 1928г. *Этнография*. №1: 3-22

1948 Медвежий праздник. *Советская Этнография*, №4. 78-104

Гондатти Н.Л.

1888 Культ медведя у инородцев Северо-Западной Сибири. – *ИОЛЕАЭ*. Т. 48, Вып. 2,

Горбачева В.В.

2004 *Обряды и праздники коряков*. Санкт-Петербург（荻原眞子　書評「V.V. ゴルバチョヴァ著「コリャクの儀礼と祭り」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2012、第 21 号：109-119」

Крашенинников С.П.

1994(1756) *Описание земли Камчатки.* СПб

Крейнович Е.А.

1969 Медвежий праздник у кетов. *Кетский сборник-мифология этнография тексты,* Москва :6-112

2001(1993) *Нивхгу*, Южно-Сахалинск

Ларькин В.Г

1964 *Орочи*. М.

Лукина Б.А.

1990 Общее и особенное в культуре медведя у обских угров. *Обряды народов Западной Сибири*. Томск: Изд-во ТГУ : 179-191

Маргаритов В.П.

1888 *Об орочах Императорской Гавани*. СПб

Молданов Тимофей

1999 *Картина мира в песнопениях медвежьих игрищ северных хантов*. Томск

Осипова М.

（Online） *Медвежий праздник орочей и удэгейцев: причины его возникновения и исчезновения из обрядовых практик.*

Пилсудский Б.

1914 На медвежьем празднике айнов о.Сахалина. *Живая старина*. XXIII 1-2

Сем Т.Ю.

2012 *Предметы по медвежьему празднику в собрании РЭМ(2) – народов Амуро-Сахалинского региона (нивхи, ороки)*（拙訳「ロシア民族学博物館所蔵のクマ祭資料（2）–アムール･サハリン地域諸民族（ニヴフ、オロッコ篇）『北海道立北方民族博物館研究紀要』第 21 号：95-108」

В.Л.Серошевский

1993(1896) *Якуты Опыт этнографического исследования*, Москва

Соколова З.П.

1998 *Животные в религиях,* Санкт-Петербург

Старцев А.Ф.

1997 Медвежий праздник удэгейцев. *Россия и АТР*. № 2:

Таксами Ч.М.

1975 *Основные проблемы этнографии и истории нивхов –середина 19-начало 20 в.* Лининград

Харузин Н.

1899 *Медвежья присяга и тотемистическия основы культа медведя у остяков и вогулов*. Москва

Цинциус В.Н.

1971　Воззрения негидальцев, связанные с охотничьим промыслом. *Религиозные представления и обряды народов Сибири в 19-начале 20 века*. Ленинград :170-200

1974　Обрядовый фольклор негидальцев, связанный с промыслом. *Фольклор и этнография*. Л.:34-41

（おぎはら　しんこ・千葉大学名誉教授）

“Girl and bear” tale and Bear ritual

OGIHARA Shinko

keyword: tale “girl and bear”, bear ritual, battle of boy and bear, Siberia

An Even tale narrates how a girl happened to spend a winter in a bear den, afterward gave birth to a boy and a bear cub. When the offspring grew up, the boy killed the brother-bear in fight. The bear left words how to perform own funeral, and told the mother not to eat the flesh of her son.

The bears in the tales “Kajgus” of the Kets, “Kheladan” of the Evenks likewise leave the same indications. On the other hands in many descriptions of bear rituals of the northern peoples, we find that females are often restricted in eating bear flesh, in relation to the dead bears either.

Another version of the Even tale describes how the boy destroyed the bear-brother in fight. This episode also has reflection in the Bear rituals where boys struggle with “bear”, a bundle of bones of the bear.